事例

「江戸東京野菜」の復活と普及・継承に関する取組

NPO法人 江戸東京野菜コンシェルジュ協会（東京都）

NPO法人 江戸東京野菜コンシェルジュ協会では、平成17（2005）年の法人設立以降、様々な活動を通して、東京の伝統野菜である「江戸東京野菜[1]」の復活・普及に取り組んでいます。

参勤交代で伝統野菜が誕生

参勤交代の制度が行われていた江戸は急激な人口増加によって野菜が不足しており、各藩の江戸屋敷では国元から持ち込んだ野菜の品種を自給栽培するようになりました。それらのうち、江戸の気候と土壌が栽培に合い、人々の嗜好に適した品種が定着することで江戸の伝統野菜が生まれました。現在でも栽培されている江戸の伝統野菜は昭和中期以降からの品種とあわせて、2011年にJA東京中央会によって「江戸東京野菜」に指定されました。

（出典）国立科学博物館　特別展和食　公式ガイドブックp45

復活に関する取組としては、市場には流通しなくなったものの、地域に残っている「江戸東京野菜」の種を見つけ出し、東京都農林水産振興財団等と協力して栽培試験の実施、農家への栽培の依頼、生産した野菜のマーケティングまでを一括してサポートする活動を行っています。こうした取組により、当初15品目だった「江戸東京野菜」を探し、現在は50品目まで増やすことができました（令和元（2019）年12月現在）。

普及に関する取組としては、大きく分けて三つの取組を行っています。

足立区立栗原北小学校の児童が収穫した「千住ネギ」

収穫した「千住ネギ」を調理する様子

子供向けには、都内の小学生を対象に、その歴史も交えながら「江戸東京野菜」を栽培する授業を行っています。「江戸東京野菜」の多くは、江戸時代に栽培されていました。毎年その野菜から取れた種を翌年まき、また収穫できるため、種まきから収穫、調理や種の採種までの一連の流れを通して「命がつながっている」ことを学ぶことができる授業となっています。例えば、足立区立栗原北小学校では、４年生が甘みの強い「千住ネギ」を栽培する取組を行っており、収穫したネギは子供たち自ら調理、試食を行います。また、成長したネギの先端にできる「ネギ坊主」から取った種を新４年生に渡す「種の伝達式」を行い、新４年生は伝達された種をプランターにまきます。子供たちは生命をつないでいくことの大切さや、足立区の農業の歴史、食の大切さを学んでいます。

一般の方向けには、「はじめての江戸東京野菜講座」として、「江戸東京野菜」にまつわる歴史やエピソードを通して、江戸時代からの食文化の変遷と、種から種へと命をつなぎ伝わってきた「江戸東京野菜」について学び、実際に野菜を食べる体験も含めた講座を行っています。

さらに、「江戸東京野菜」についての深い知識と東京の農業や食文化を学び、「江戸東京野菜」の普及と地域振興に貢献する人材育成を目的とし、「江戸東京野菜コンシェルジュ育成講座」を毎年開催しています。現在、市場関係者、料理人、教諭、食育関係者を中心に130～140名のコンシェルジュがおり、講座で得た知見を各々の仕事で生かして活動しています。

今後とも、これらの「江戸東京野菜」の復活・普及に関する取組を通して、古くから東京で受け継がれてきた食文化を次世代に伝え残していきたいと考えています。

1　東京都内で栽培されており、種苗の大半が自家採取又は、近隣の種苗商により確保されていた江戸時代から昭和40年頃までのいわゆる在来種、又は従来の栽培法等に由来する野菜のこと